

JA全農ウィークリー

J A Z E N - N O H W E E K L Y



2面

野菜残さを使った
「サラダペーパー」開発

(群馬県本部)

4-5面

特集 労働力支援
山形県・JTBと農作業に付加価値を

(山形県本部)

Web版
JA全農ウィークリーは
こちらから



<https://www.zennoh-weekly.jp/>

News!

飛騨牛と県産青果物を海外へPR

台湾・シンガポール・マレーシアでトップセールス

岐阜県本部



飛騨牛の魅力をPRする西村県本部長

岐阜県本部と岐阜県農林水産物輸出促進協議会は、古田肇県知事が行う県産農畜産物などのトップセールスと連携し、台湾・シンガポール・マレーシアで飛騨牛プロモーションと県産青果物フェアを開催しました。

県中央会の櫻井宏会長と県本部運営委員会の山内清久会長、西村寿文県本部長は7月13～17日の5日間、台湾・シンガポール・マレーシアを訪問し、県産農畜産物の輸出拡大に向けたPRを行いました。

台湾ではJA全農インターナショナル(株)を通じて、長年飛騨牛を取り扱う現地輸入業者の直営レストランに、

系列飲食店関係者や現地メディアなどを招待。西村県本部長が飛騨牛の魅力を説明するとともに、素材を生かした特別メニューを用意し、おいしさをPRしました。輸入業者代表からは「飛騨牛を台湾でベストセラー商品にする」との力強い言葉がありました。

シンガポールでは同社を通じて県産青果物フェアを

開催し、マレーシアでは飛騨牛海外推奨店の認定式を行いました。現地メディアや流通関係者へ直接アピールすることで、今後の輸出拡大に向けて手応えを感じる取り組みとなりました。

今後も県産農畜産物の販売力強化に取り組み、生産者手取りの向上に貢献していきます。

News!

野菜残さを使った「サラダペーパー」開発

加工センターで排出されるキャベツの芯や外葉を有効利用

群馬県本部



開発したサラダペーパー

センターで発生したキャベツ残さは家畜飼料として販売していましたが、製造量の増加に伴い残さも増えたことから他の用途を模索していました。そこでキャベツ芯に含まれる豊富な繊維質に着目。紙への活用を検討し、印刷業のジェイエイブリテックと紙加工を手がける(株)共同紙販HDの協力により、約2年をかけて「サラダペーパー」が完成しました。原料は90%が古紙、10%がキャベツ残さで、キャベツの

群馬県本部は(株)ジェイエイブリテックと協業し、県本部の青果物一次加工センターでキャベツを加工する際に排出される芯や外葉などの野菜残さを紙の原材料にすき込んだ用紙「サラダペーパー」を開発しました。4月から名刺などに利用しています。

センターで発生したキャベツ残さは家畜飼料として販売していましたが、製造量の増加に伴い残さも増えたことから他の用途を模索していました。そこでキャベツ芯に含まれる豊富な繊維質に着目。紙への活用を検討し、印刷業のジェイエイブリテックと紙加工を手がける(株)共同紙販HDの協力により、約2年をかけて「サラダペーパー」が完成しました。原料は90%が古紙、10%がキャベツ残さで、キャベツの

色味や質感を視覚的に確認できるようにキャベツの外葉を原材料に追加しています。また、残さの急速な変色を防ぐために効率的な製造計画が組まれるなど、製品の品質にこだわって製造されています。



製造途中のキャベツ残さ



「とちぎ和牛」若手の力でブランド力向上へ

若手経営者組織「とち和会」を発足

栃木県本部

今後に向けて致団結する「とち和会」の会員ら



生産者の高齢化や生産費高騰などにより「とちぎ和牛」の生産基盤の維持・拡大が難しい状況となる中、次世代を担う県内の若手経営者55人が「とち和会」として団結。若手の新たな視点での販促活動や研究会・情報交換などを通じて、生産拡大とさらなるブランド力向上を目指します。

栃木県本部が事務局を務めるJAグループ栃木和牛販促委員会は7月26日、「とちぎ和牛」の若手経営者組織「とち和会」の発足式を行いました。

初代会長を務める横尾光広さん（JAかみつが）は『とちぎ和牛』がどうあるべきかを会員同士の意見を出し合いながら、若手ならではの視点で県内外の消費者へ効果的にアピールしていきたい」と意気込みました。



「山形県産ふぞろいえだ豆」を発売

規格外品を活用した「ニッポンエール」浅漬け商品

山形県本部・営業開発部

規格外のエダマメを使用した「ニッポンエール山形県産ふぞろいえだ豆」



「ニッポンエール山形県産ふぞろいえだ豆」は、SDGs（持続可能な開発目標）の一環として、JA全農山形おきたま園芸ステーションで発生する規格外のエダマメを使用しており、ピックルスコーポレーションのグループ会社である株尾花沢食品で製造します。全農とピックルスコーポレーションは、今後も特徴ある国産農畜産物を使用した魅力的な商品の共同開発を進めていきます。

全農は株ピックルスコーポレーションと国産素材を活用した浅漬け商品として、「ニッポンエール山形県産ふぞろいえだ豆」を共同開発しました。山形県内を中心としたヨークベニマルで8月7日から販売しています（※一部店舗では取り扱いのない場合があります）。



クイズを通じて牛乳・酪農を知ってもらおう

牛乳トリビアクイズでプレゼントキャンペーン開催中

酪農部

「特製シール」の2次元コードからクイズに参加できます



6月には各地で牛乳普及イベントが開催されることから、トリビアクイズ特設ページにアクセスできる「特製シール」を作成。東京・新宿で開催した「牛乳飲み比べイベント」の来場者や、県本部のイベントなどで配布しました。さらに広報・調査部のSNS掲載や、サンドイッチハウス「メルヘン」で販売した練乳入りコラボ商品には特設ページへ誘導する2次元コードを貼付するなどさまざまな手法で消費者に活動を発信中です。

全農は6月の「牛乳月間」に合わせて「牛乳トリビアクイズ第2弾」プレゼントキャンペーンをスタートしました。7月末締め切りの応募者は1万人超えとなりました。9月末の第2回締め切りでは抽選で100人に「農協ミルク国産紅茶仕立て」が当たります。

農業×観光＝関係人口創出 山形県・JTBと連携

農作業に付加価値をプラス 新たな試みが始動

山形県本部と山形県、(株)JTBの三者は2023年3月、連携協定を締結しました。県本部とJTBが21年から取り組んできた農作業受託事業をベースに、三者の相互連携によって農繁期の労働力確保や農業を起点とした関係人口創出を推進するものです。都道府県も加わる連携協定は全国初で、農作業受託の目標参加人数は、26年に延べ1万人を掲げています。

【山形県本部】

三者連携により展開する「元気な農業人材確保プロジェクト」の一環として、5月下旬から7月上旬のサクランボの最盛期に人手不足に悩む産地の労働力確保に取り組みました。

昨年度の取り組みとの大きな違いは、参加者への旅費の助成がない中で県外から多様な参加者の呼び込みを行う点にあり、参加者が山形ならではの体験で付加価値を得られる企画を新たに設定しています。

体験やボランティアではなく、対価を得て本気の農作業を体感できる「アグリツアー」と、農作

業従事を社員教育に取り入れ企業経営課題の解決に貢献する「アグリワークショップ」という二つのプランで募集を行い、参加者限定の農村交流イベントや異業種交流会が開催されるなど、産地だけでなく、参加者にとっても特別なメリツトのある施策を実施しました。

6月22日は、天童市にある(株)たきぐちファームで「アグリツアー」の参加者1人と「アグリワークショップ」として県外企業4社から各1人ずつ、計5人がサクランボの収穫や選果作業を行いました。



サクランボの着色状態を確認しながら丁寧にパックに詰めていく



サクランボの収穫に真剣に取り組む参加者

たきぐちファームの滝口征司代表取締役は「熟すのが早いサクランボは、収穫期の人手確保が非常に重要。産地はとも助けられているし、参加者にとっても良い経験になるなら、二石一鳥。ぜひ、取り組みを二層拡大させてほしい」と期待を寄せます。

観光旅行を兼ねて東京から参加した麻生芳彦さんは丁寧なサクランボを摘みながら「観光はのびのびと山形の自然を感じ、農作業は真剣にやりがいを持って働く。このメリハリは初めての経験」と話します。

また、デロイトトーマツコンサルティング合同会社の村本元気さんは「全く違うジャンルの企業の方でも、年齢や性別が異なっている。一緒に汗を流しているうちに、自然と交流が深まっている。かしこまらずに話せることで、ふとした会話から新たな視点や学びが得られ、ビジネス

チャンスのきっかけになる」と話します。休憩時間には、JR東日本や㈱NKBの参加者と談笑する場面もありました。

アグリツアー

美しい自然の中で
地元の方との交流も楽しめる
農村交流イベント

「アグリツアー」の参加者限定で開かれた農村交流イベントでは、広島県や奈良県、大阪府、東京都など県外在住者8人が参加。尾花沢市細野集落にある「清流と山菜の里 ほその村」



地元産の食材を使った昼食を食べながら
地元の方々と交流

にあるワラビ園で収穫体験を楽しんだ後、同集落の農家レストラン「蔵」で、フキやイワナなど地元産の食材がふんだんに使われた昼食を食べながら、地元住民との交流を楽しみました。

参加者は、6月11〜24日の数日間、東根市と天童市、寒河江市のサクランボ園地で、収穫や選果作業に従事。こうした農作業従事者で対価を得られる旅行商品に、農村交流イベントが付随する企画は全国でも例がありません。

大阪府から参加した西村由紀子さんは「地元の方との交流は心が温かくなる。山形の自然も人も大好きになった。農作業では、もてなしてくれた場所への恩返しとして役に立つことができ、



自然に囲まれながらワラビを収穫

普段の旅行の何倍も学びと楽しさがあった」と話しました。

アグリワーケーション

農作業を通じて生まれる絆と
ビジネスチャンス
「農を起点とした異業種交流会」

「アグリワーケーション」に付随して開催された「農を起点とした異業種交流会」は、農業を契機に新たなビジネスチャンスへの発展や産業活性化を目指して企画されました。県外企業と県内企業それぞれ5社の代表者や同プロジェクトの関係者ら約40人が参加。各社は農業や食に関連する取り組み事例の発表を行いました。

昼食を挟んで行われた交流会では、名刺交換や事例発表に対しての質疑応答の他、県産農産物の魅力や「サクランボ収穫作業 があるある」など、一般的な異業種交流会では上がらない話題で盛り上がりを見せました。(株)NTTドコモの大関優さんは「園地で一緒に汗を流した

仲間なので、まるで友人のよう
に気兼ねなく仕事の話ができ
る」と話していました。

こちらも「アグリツアー」同様、
参加者は6月10〜24日の間、



作業着ではなくスーツで顔を合わせるのは初めて



「農」と「食」に関する各社の取り組み事例を発表

サクランボ園地で収穫や選果作業に従事。「アグリツアー」との違いは、農作業の対価は個人ではなく、各会社・団体に支払われる点です。こうした農作業受委託事業による社員研修プログラムに、異業種交流会が付随する企画も、全国で初めて行われました。

10月以降には「ラ・フランス」の収穫・出荷作業でも、同様の取り組みを予定しています。山形県本部と山形県、JTBでは、今回の成果や課題を検証するため、参加者・生産者向けアンケートを分析するなどして、さらなる取り組みの進化・深化を進めていきます。

アグリツアー
紹介動画はこちら



アグリワーケーション
紹介動画はこちら





資産管理事業の重要性

組合員が保有する土地を有効活用し、資産を守るのが農住事業です。人口が多く、資産価値の高い土地が多い神奈川県では、資産保全・承継にあたり相続税対策に悩む組合員が多くいます。

「施主代行方式」で組合員の資産を守る施設事業

J A・連合会と連携し総合的支援を実施

しかし、土地活用を含む資産管理は複雑で専門的な知識を必要とし、個人で取り組むには高い壁があります。このような背景から「世代を超えて大切な土地を守りたい」という組合員の気持ちに応えるため施設事業が進展しました。

複数地権者による土地活用

「5人の地権者が隣接する先祖伝来の土地をいかに活用するか」。このような相談は事業用の定期借地としてテナントを募集することで対応し、最も意欲的だったスパーマーケットに地権者会で決定しました。工事中に土中から出てきたコンクリート塊の撤去交渉や、商業施設の建設に関わる行政、警察、消防への許認可業務も全農がサポートしました。



複数地権者による土地活用事例

組合員支援の「施主代行方式」

複雑で専門性の高い施設事業を、施主（組合員）の立場に立つてサポートするのが「施主代行方式」です。施主に代わり、建築相談や工事検査などを行います。また、代金の過払いを防ぐ支払代金の保全制度や、建設業者が倒産した際には一定の範囲で未完工事や施工不備を補償する制度も設けています。

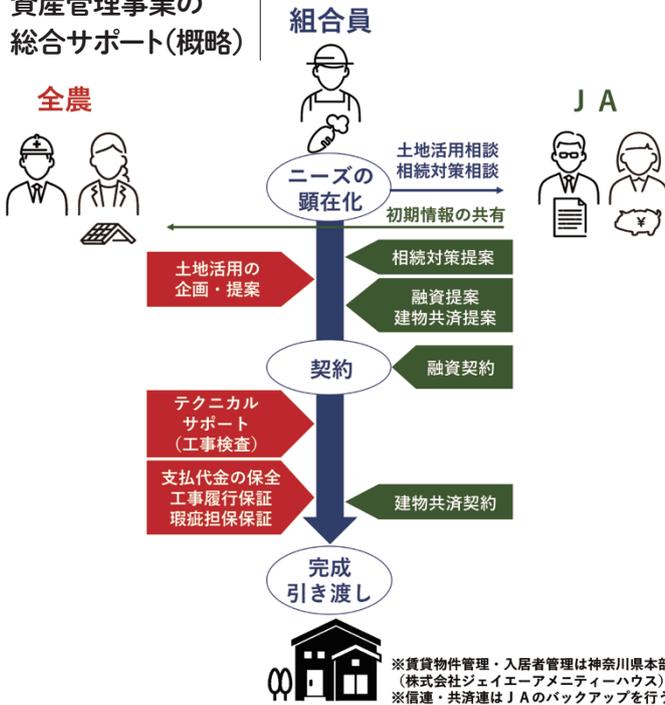
一級建築士事務所の技術支援

県本部には22人の一級建築士が所属し、J A施設をメインに、住宅や店舗などさまざまな用途の建物の設計監理を行うほか、施主代行方式に不可欠な工事検査の業務・許認可業務のサポートも担っています。

資産管理事業の「総合事業としての日常化」へ

今後も、J Aグループの経済・信用・共済・指導事業を横断した総合的な支援を行っていくながら、組合員に寄り添い、既オーナーへのフォロー（＝経営のメンテナンス）に加えて、子細な相談事でも同事業で解決できないかを検討。その視点を持つことで資産管理事業の「総合事業としての日常化」をJ Aとともに進め、組合員の資産管理を継続的にサポートします。

資産管理事業の総合サポート(概略)





標高差生かし果樹の一大産地

世界農業遺産の認定も弾みに

山梨県にあるJAふきは、県の中央より南東部に位置し、甲府盆地特有の気温の寒暖の差を生かして、桃やブドウを中心とし

た果樹の一大産地を形成しています。標高差により農作物のリレー出荷が可能であり、トウモロコシやスモモ、桃、ブドウ、柿などを長い期間で供給できる特徴があります。

「日本の桃源郷」最新設備で高品質出荷

特に桃栽培については古くから産地化され、「日本の桃源郷」として日本の生産量を誇っています。共選所では、最新型光センサーの選果機による糖度測定技術や予冷・保冷庫を導入し、品質の統一化を図ることで高品質出荷を確立しています。産地のブランド化にも力を入れ、管内の御坂・一宮・八代地区のオリ

生産量日本を誇る桃



ジナルブランド桃は県内外から高く評価されています。

行政と連携し宣伝活動 SNSで情報発信も

各地でのトップセールスや販促会も盛んに実施しています。行政機関や県の農畜産物販売強化対策協議会



「笛吹フェア」であいさつする小池一夫代表理事組合長

JAふえふき (山梨県)



概要	2023年1月31日現在
正組合員数	6875人
准組合員数	3532人
職員数	285人
販売品取扱高	176億6千万円
購買品取扱高	54億1千万円
貯金残高	1226億1千万円
長期共済保有高	3487億2千万円
主な農畜産物	桃、ブドウ、スモモ、柿、トウモロコシ

と連携した「笛吹フェア」では、市場関係者や消費者と直接関わることで、効果的な宣伝活動を行い、JAふえふき産の知名度向上と消費拡大に努めています。

管内3カ所にある直売所も盛況です。共選所に併設されているため、鮮度の高い農産物を購入することができ、出荷の最盛期には、開店前から列がでるほどのにぎわいを見せています。県外の観光客や若年層の消費者に向け、SNSを活用しリアルタイムで情報発信している直売所などもあります。

持続可能な産地形成へ 担い手育成も重点に

昨年、笛吹市を含む峡東

担い手支援として行政と連携した栽培講習会



地域の果樹農業システムが世界農業遺産に認定されました。今後も持続可能な産地形成に向け、今まで以上に高品質生産・出荷を推進し、生産者の所得増大、担い手育成、地域の活性化に貢献していきます。

未来の卓球日本代表が神戸に集結!



全農杯2023年
全日本卓球選手権大会
(ホープス・カブ・バンビの部)に
特別協賛

全農は、7月28~30日、兵庫県神戸市のグリーンアリーナ神戸で開催された「全農杯2023年全日本卓球選手権大会(ホープス・カブ・バンビの部)」に特別協賛し、出場選手を「ニッポンの食」で応援しました。

【広報・調査部】

4年ぶりに男女同時開催となり帯同者制限もなくなった大会には、各都道府県大会を勝ち抜いた卓球少年・少女たち1001人が集結し、ホープス(小学6年生以下)、カブ(同4年生以下)、バンビ(同2年生以下)の各種目の頂点を競いました。大会最終日には安田忠孝代表理事専務が1位から3位までの選手に新潟県産米「新之助」と、国産黒毛和牛を贈呈。

会場では、石川佳純さんが監修した「石川佳純(かすみん)カレー」や全国各地の飲料を販売しました。また、石川さんの特集企画として、全農との12年間の歩みをまとめたパネルや、石川さんの小学生時代についてまとめたパネルの展示を行いました。



副賞を贈呈した安田専務とホープスの部の入賞選手



石川佳純さんの展示を見る選手たち



石川さんが小学生時代に苦手だった野菜を克服したエピソードを実物の野菜と一緒に展示

副賞一覧

賞名	賞品
優勝	新潟県産米「新之助」120kg、国産黒毛和牛1kg
2位	新潟県産米「新之助」60kg、国産黒毛和牛1kg
3位	新潟県産米「新之助」30kg、国産黒毛和牛1kg
フェアプレー賞	石川佳純(かすみん)カレー、石川佳純さん直筆サイン色紙
参加賞	インスタントごはん、包装餅、えひめ飲料「POM塩と夏みかん」他

JA全農の産地直送通販サイト
JAタウン ショップ紹介

酪農王国オホーツクおこっぺ

澄んだ空気とどこまでも続く草原——。そんな北海道オホーツクの豊かな自然の中で育った牛たちから搾られたミルクを100%使用したアイスクリームです。

原乳には特に乳質の優れた生産者のものを厳選。朝搾られた牛乳はすぐ工場へ送られ、その日のうちに製品になります。味はバラエティーに富んだ6種類。スタンダードなバニラ、牛乳の風味を感じるミルク、JA夕張市から果汁を取り寄せて製造した夕張メロン、北海道特有の木の実ハスカップ、抹茶、ココアを各2個ずつ合計12個入りでお届けします。



おこっぺアイス12個セット [6種各2個]
……5170円(税込み)



▶ JAタウンはこちらから <https://www.ja-town.com>
▶ お問い合わせは shop@ja-town1.com